有朋自遠方来

大和文華館に寄せる歌

―古池やかはつ飛こむ水の音―
―余りにも有名な芭蕉のこの俳句は、正に春の今頃の季節に相応しい句と解することも出来ます。ギャラリーのベランダから眼下に見おろせる当館の池も、この芭蕉の俳句に由来したわけではありませんが、いつの頃からか〝蛙股池(かえるまたいけ)〟と呼ばれてきました。今、この池の春はたけなわ、池の端の桜の花はその美麗な姿をぬるんだ水の面に映して、行く春を惜しんでいるのです。

古池や―で始めた今日の本欄では大和文華館に寄せる俳句のお話しをいたしましょう。水原秋桜子という名を御存知の方は多いと思います。俳句雑誌「馬酔木（あしび)」の主宰で永年活躍されてきたことは余りにも有名です。水原氏は十数年前に館を訪れて以来、当館のファンとなられ、以後度々、同人の方々が来館なさいました。最近、その同人であり、近くにお住まいになる大島民郎氏が館を訪れ、「馬酔木」に寄せられた大和文華館を詠んだ俳句を我々に紹介して下さいました。美術と文学とは一身同体のものではありますが、日頃、そのような古美術愛好家が当館を訪れて館に寄せる歌を詠まれていたとは露知らずにいました私共は、そのようなファンが名のり出ましたことに大いに驚喜したのであります。あわてて今、平凡社が昭和30年に刊行しました「大人名事典」で〝水原秋桜子〟の個所を引きますと「馬酔木」の作風として、〝人事句よりも風景句を本領とし、また素材を古美術、旧跡、名勝にとることを好んでいる〟とあります。なるほどなるほど。

ベランダより池をのぞむ

「馬酔木」の同人の方々が当館を訪れるということは当然のことなのであります。大島氏がこの度持って来られた句の中にも当館の美術品に寄せられたものが多いのです。春の一時、満開の桜の花の散らぬ内に、ここに、その一部を披露いたすことにいたしましょう。

業平の旅路霞むや返り花
水原秋桜子

池干して昼の虫の音残しけり
水原秋桜子

亡きひとに似て行春の立女佛
大島　民郎

中庭に筍　壁に墨竹図
大島　民郎

断簡の絵巻はなやぐ蟬しぐれ
大島　民郎

勾玉の色すきとほり春深し
平田　想白

行春や金箔厚き手筥あり
藤井　重久

紅梅や唐詩きざめる筆の軸
冨山　青泝

中庭の竹へだて見る壺涼し
村上　光子

陶枕の夢安かれと牡丹文
山田　孝子

山百合やしばし開館待たされて
水内　菊代

（4月7日記）

季刊 美のたより No.39
昭和52年 5月1日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.